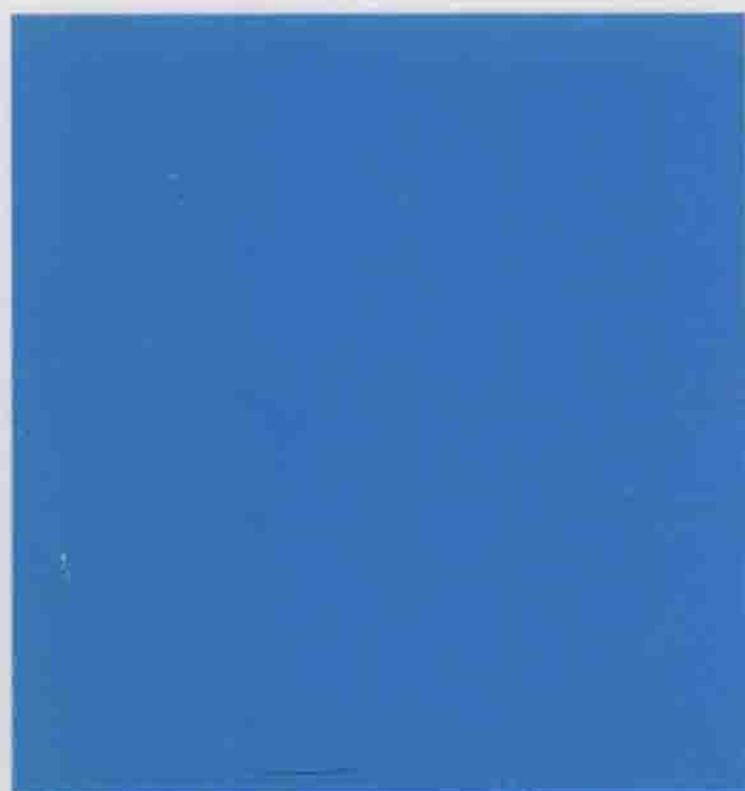


新版 大学生のための レポート・論文術

小笠原喜康



講談社現代新書

2021

新版 大学生のための レポート・論文術

小笠原喜康

講談社現代新書

2021

講談社現代新書 2021

新版 しんぱん 大学生のためのレポート・論文術 だいがくせい

二〇〇九年一月二〇日第一刷発行 二〇一一年六月一七日第一五刷発行

著者

おがさわらひろやす
小笠原喜康

© Hiroyasu Ogasawara 2009

発行者

鈴木哲

発行所

株式会社講談社

電話

東京都文京区音羽二丁目二二-二 郵便番号 112-8001

出版部 〇三―五三九五―三五二一

販売部 〇三―五三九五―五八二七

業務部 〇三―五三九五―三六一五

装幀者

中島英樹

印刷所

大日本印刷株式会社

製本所

株式会社大進堂

定価はカバーに表示してあります Printed in Japan

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。[R] (日本複写権センター委託出版物)

複写を希望される場合は、日本複写権センター (〇三―三四〇一―二三八二) にご連絡ください。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。

送料小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本についてのお問い合わせは、現代新書出版部あてにお願いいたします。



目次

はじめに 3

1. レポート・論文のあたりまえの基本…………… 15

1. 1. レポート・論文の共通の書式とレイアウト 17

【ヒント1 Wordの便利な使い方】 22

1. 2. 書き方の基本ルール 24

【ヒント2 アタマそろえの方法】 32

2. レポート・論文の基本ルール…………… 35

2. 1. 引用文の表記法 39

2. 2. 注釈・引用・参考の文中注記法 42

《コラム1 コピペは悪いことか?》 45

2. 3. 注釈・引用文献・参考文献の文末一括表記法 46

2. 3. 1. 従来型の一括表記のきまり 50

(1)従来型の【注釈】のきまり 50

(2)従来型の【引用・参考文献】一覧のきまり 54

2. 3. 2. 近年型の表記のきまり 56

(1)近年型の【注釈】のきまり 56

(2)近年型の【引用・参考文献】一覧のきまり 58

【ヒント3 英文の間延びを防ぐ方法】 58

2. 3. 3. その他の資料 59

(1)インターネット資料の表記 59

(2)新聞記事の表記 62

3. 文献・資料の集め方 63

3. 1. 下調べの三つの方法 66

3. 1. 1. 辞書での下調べ 67

(1) gooの国語辞典 67

(2) 統合辞書ウェブリオ (Weblio) の類語辞典 68

3. 1. 2. 百科事典での下調べ 69

(1) ネットで百科@Home 70

(2) Yahoo! 百科事典 70

(3) Japanknowledge 71

3. 1. 3. webでの下調べ 71

(1) ドメイン検索 72

(2) カテゴリー検索 73

【ヒント4 web検索のコツ】 75

3. 2. 文献検索の三つの方法 76

3. 2. 1. 国立情報学研究所 GENii 検索・Cinii 検索 77

3. 2. 2. 国立国会図書館のNDL-OPAC検索 81

3. 2. 3. web検索その他 84

(1) 研究機関のHP上の文書検索 84

(2) 個人のHP上の文書検索 85

3. 3. 文献入手の方法 88

3. 3. 1. 大学等の研究機関の図書館の所蔵情報確認 89

(1) 論文の場合 89

(2) 図書の場合 92

3. 3. 2. 公共図書館の所蔵情報確認 93

3. 4. さまざまな情報を探す方法 94

3. 4. 1. 新聞情報 94

3. 4. 2. 統計情報 97

3. 4. 3. 情報への統合インデックス 98

3. 4. 4. さまざまな分野の役立ちサイト 99

4. レポート作成の基本……………

4. 1. レポートの種類による基本構成 107

4. 1. 1. 現地調査報告型レポートの形式 109

4. 1. 2. 実践研究報告型レポートの形式 112

4. 1. 3. アンケート調査報告型レポートの形式 114

4. 1. 4. 文献調査報告型レポートの形式 116

4. 1. 5. テーマ論証型レポートの形式 117

4. 2. レポート提出時の注意点 118

4. 2. 1. 通常提出の場合 118

4. 2. 2. メールによる提出のときの注意点 119

【ヒント6 図表を入れてわかりやすく】 122

4. 3. パワーポイントを使ったプレゼンの基礎 124

4. 3. 1. パワポ・レイアウトの四つの基本 124

(1) ジャンプ率 125

(2) 図版率 125

(3) グリッド拘束率 128

4. 3. 2. パワポ「べからず」集 131

(1) パワポの画面は小さい 131

- (2) アニメーションに凝らない 132
- (3) 字体をいろいろ使わない 132

5. 卒業論文の執筆

135

5. 1. スケジュールをたてる 137

【ヒント7 資料は汚して読む】 142

【ヒント8 ケータイでメモ・ノート】 144

【ヒント9 人の頭を借りる】 146

【ヒント10 執筆まったただ中のコツ——付箋ふせんを使う】 151

《コラム2 論文と赤ちゃん》 156

5. 2. 卒業論文の構造 158

5. 2. 1. 文献研究論文の基本構造 158

5. 2. 2. 文献研究論文構造を詳しくみると 166

(1) 序章の構成 168

【ヒント11 読む価値のある文献の見分け方】 172

(2) 1章〜終章・資料・文献の構成 172

《コラム3 論文は人のふんどしで相撲をとるようなもの》

178

5. 2. 3. 調査・実験研究論文と短い研究論文の基本構成 179

(1) 調査・実験研究論文の基本構成 179

(2) 短い論文の構成 181

5. 3. 論文の題名を決める 183

5. 4. 論文を整えるⅡ「瀬戸テク」 185

5. 4. 1. 基本書式テク 186

(1) 章題名書式 186

(2) 節題名と項題名の書式 188

(3) 図表の表記 188

(4) 注釈・参考資料の表記 189

(5) 引用・参考文献の表記法と文献リスト 190

5. 4. 2. 論述テク 190

5. 5. 校正記号の使い方 192

6. わかってもらえるレポート・論文を書くために

195

6. 1. 文章のわかりやすさをつくる唯一の原則 197

6. 2. その他の効果的なテクニック 202

6. 3. わかってもらえるレポート・論文の三つの条件 205

6. 3. 1. 自分のコトバで語る努力をしている 206

《コラム4 自分の考えをつくる》 208

6. 3. 2. 先人を少しでも乗り越える努力をしている 209

《コラム5 ダメ論文アラカルト》 212

6. 3. 3. 読む人を説得する努力をしている 214

おわりに 217

新版 大学生のための レポート・論文術

小笠原喜康

講談社現代新書

2021

はじめに

本書は、学生のみなさんが大学に入っていちばん戸惑う、レポートと卒業論文の書き方についてのマニュアルである。

世に論文の書き方の本は、それこそ山とある。毎月一冊は、この手の本が出るのではないかと思われるほどである。しかしそれらの本は、どれも「指南書」である。本書は「指南書」でも「秘伝書」でも「奥義書」でもない。ただのマニュアルである。奥義を究めた^{きわ}い方は、そちらの本をお薦め^{すす}める。

大学に入って、いちばん困るのがレポートの書き方である。それも、どうでもいいようなことがわからない。パソコンで書いていいのやら、やはり手書きの方がいいのやら。パソコンで書くにしても、一行何字？ 紙の大きさは？ 名前はどこに書くの？ 紙はホッチキスで留めるの？ ヘアピンじゃだめかしら？ こんなことがわからない。

レポートを書くのにインターネットは当然使う。しかしその使い方ときたら、せいぜいヤフーやグーグルの検索窓にコトバをいれてENTERキー、くらいしか知らない。そうや

って検索したとしても、膨大な数のヒットにまた戸惑う。一方、教員の側は、ネタのばれる同じコピーレポートに悩まされる。本書は、そうしたことを避けるための、どうでもいのような些末^{さまつ}であたりまえの基本中の基本について書いてある。難しいことは、なにも書いていない。

逆にいえば、本書に書いてあることぐらいは、誰でも知ってはいなくてはならない。なのに、小学校でも中学校でも高校でも、そして肝心の大学ですら、誰も教えてくれない。それは、日本の教育のせいかもしれない。

日本の教育は、一九世紀以来の記憶中心から変わっていない。自分で考える、自分の理屈をたてるなどということは、いまだに御法度^{ごはつと}のようである。二一世紀の今、もうすっかり知識産業時代に入っているのに、いまだに工場の歯車人間用の教育である。「モダン・タイムス」のチャップリンに笑われそうである。

もちろん本書は、この現状を変えるためのものではない。本書を読んだからといって、すぐに論文が書けるようにも、自分の理屈をたてられるようにもならない。とはいえ、最低限のルールも知らなくては、一步も前に進めない。基本中の基本、まずはここから始めたい。

そのため、本書では、しばしば参照することになる基本ルールや検索技術などを前半に

もってきている。そして説明の前に要点を図示してある。「目次」もすぐに参照できるように細かくつけた。大学に入ってから卒業論文を書くまでの四年間、レポートを書いたり、なにか調べ物をしたりするときに、座右においてちよこちよこ確認してもらいたい。

後半は、レポート・卒業論文の執筆に役立つように、具体的なレイアウトからプレゼンのためのパワポの使い方、卒論スケジュールのたてかた、章構成の考え方、そして文章の書き方まで、かいつまんでのべてある。

なお、本書は、二〇〇二年に刊行した『大学生のためのレポート・論文術』をアップデートし、最初から書き直したものである。さいわいこの本は、毎年多くの方に読んでいただいている。おかげさまでいまでは、この関係の本の定番の一書に加えていただけるまでになった。これほどまでに読んでいただけたことは、それこそ夢にも思わなかった。本当にありがたいことだと思う。しかし感謝してばかりもいられない。多くの方に使っていただいていいるということは、それだけ責任も大きいことになるからである。

同書を送り出してから七年あまり。情報環境は大きく変わった。インターネットが普及してわずか一〇年、さまざまな情報検索システムが開発され、電子図書館への歩みも本格化してきている。同書が刊行されたときとくらべて、はるかに使いやすい環境が整いつつある。しかし他方で古いシステムが廃止されてもいる。かつて「文献検索の王」であった

国立国会図書館の『雑誌記事索引累積索引版』は、すでにない。

本書は、こうした変化を受けて、情報収集の部分を中心に大幅に書き直した。しかし、単なる修正・充実ではなく、よい点は残しつつも、すべてを書き換えるつもりで取り組んだ。論文もそうだが、一部を手直ししようという意識では、全体にちぐはぐさが出てくるからである。

この新版を参考にして、論文をとおして自分の考え方づくりをしていただきたい。これは、旧版のときからの変わらぬ筆者の願いである。論文は、調べたことを書くのではなく、自分物語を書くのだからである。テーマがなんであれ、それは同じである。

秋はやい二〇〇九年の九月に

筆者